東九州地方に於ける装飾古墳

賀川光夫

目次

まえがき
一、緒論
二、東九州地方に於ける装飾古墳の分布
三、装飾古墳の形式
四、古墳の壁画
五、東九州の装飾古墳
六、結語

まえがき

東九州地方の裝飾古墳に就いて稿を進める動機は先年筆者が日本考古学協會の古墳調査に大分縣を擔當し全縣下の古墳調査を實施した際特に古墳の裝飾について興味を感じ種々先輩の御指導により精査をした結果、幾分資料の蒐集も出來一應發表する段階に到達した爲敢て愚稿を發表することにしたのである。

一、緒論

日本に於ける裝飾古墳の研究は從來非常に多くの學者により論述されて居るが其の個々の内容について細かに檢討したものは少いようである。それは北海道東北地方の一部を除いて略全国に亘る廣範圍に約九十に及ぶ裝飾古墳を精査すると云ふ困難によるものであろう。筆者は昭和二十六年日本考古学協會の古墳分布の調査を東九州地方（大分縣）にわたり擔當し、其際從來比較的調査不足の當地方に於て意外にも數多くの裝飾古墳を發見することが出來、特に興味深い古墳壁画の實測掃影等を行い一應其の内容を檢討することが出來た。

扨從來日本に於ける原始繪画として注目されて居るものに大和國唐古遺跡發見の彌生式土器に施文された繪畫(1)文様や、廣く畿内を中心として分布する銅鐸(2)文様等があるが、繪畫としてはいづれも幾何学的な記號や器具、動物、人物、等を形象的に表現したもので畫の構圖としての發展は認められないようである。而るに古墳壁畫はこれ等に比して藝術的な内容の飛躍を物語るものとして先づ注目されなければならない。即ち古墳壁畫には大別して二つの相異なれる要素をもつて居る。その一つは從來幾何学的文様と云われた呪術的な記號と、他は完全な自由畫としての寫實的な一面である。この古墳の壁畫はたしかに前代の土器や銅鐸に表現された極めて本能的で直感的なものより一歩前進し、精神的にも技術的にも可成りの進歩をなして居る。幾何学的文様に示された呪術的な記号のなかには、人間本能の宗教的表現として人間の深い思惟があふれ出て居り何か古きものへの憧憬を感ずる。又人間の自由意志により現實を把握した自然の描寫はこれ又作者の思惟があふれて居り、東国東郡伊美町鬼塚古墳の自然界を畫題とした立体的な線刻等に見られる超現實的以前とも云ふべきもの等に發達して居る。呪術的魔術的記號といえ自然界を描寫した自由畫といえ共に原始人に相應しい思惟を物語るもので極めて興味深いものである。以下東九州地方の裝飾古墳の壁畫を中心として論述することにす

る。

(1) 「大和國唐古彌生式遺跡の研究」京都大学文学部考古学研究報告第十六號

(2) 「日本考古学論攻」

梅原末治

二、東九州地方に於ける裝飾古墳の分布

從來東九州地方に於て裝飾古墳として注目されて居たのは日田郡五和村穴観音古墳[1]の彩色による所謂幾何学的記號及び舟等の形象的な文様と、大分郡石城川村千代丸古墳[2]の線刻による用器畫的自然畫の二例に過ぎなかつたのである。この稀薄な分布から考えれば東九州地方に於ける裝飾古墳は一應西九州地方の影響による一地方的なものであると見られて居たことも納得出來るのである。然し乍ら筆者は昭和二十六年以降の古墳分布調査に於て相當數の古墳の壁畫を發見することが出來た。その結果、裝飾古墳の分布が意外に廣く、其の内容から嚴密には二つの地域に分けて其の分布を檢討することの必要を感じたのである。即ち其の一は筑後平野日ノ岡古墳[3]等の一連の裝飾古墳群の一部と考えられる筑後川上流の日田盆地周邊の丘陵に群集する彩色の裝飾古墳であり、他の一は東九州地方の海岸平野に接する低い丘陵に点在する彫刻による線畫を壁畫とする高塚式古墳である。然し筑後川と大分川を結ぶ所謂日田大分地溝帶の線上を中心として最も濃密に分布して居ることは以上の裝飾の種類による分布とは別にいづれも筑後地方と非常に關係のあることを物語るものであろう。即ち日田盆地周邊には彩色による裝飾古墳四が既に調査されて居り、これらはいづれも円墳の群集墳中に認められたもので玄室羨道等の石槨壁面に施文されたものである。筑後川は上流を玖珠川と稱し森盆地を貫流するが、この森盆地の東北の低い丘陵上に鬼ケ城古墳と稱する横穴式石槨の可成り巨大な封土を有する古墳が存する。この古墳の隔壁に自然畫を線刻した裝飾が認められるが、日田地方の古墳とは全く構造を異にする。更に分水嶺を越えて大分川を降れば大分平野が展開する附近に前述の千代丸古墳が存し、奥壁に凸出する棚狀の前面に彫刻された線畫は、又特異な裝飾の要素を示して居る。次で大分縣の裝飾古墳中の白眉とも云えるものに東國東郡伊美町の鬼塚古墳がある。この古墳の玄室壁面に線刻された自然畫は非常に興味深いものであるし、しかもこの古墳が国東半島の尖端に位置し裝飾古墳としては孤立した位置に存するのも注目すべきであらう。これら鬼ケ城古墳、千代丸古墳、鬼塚古墳等の線畫による裝飾は更に宇佐豊前平野に延び、筑上郡唐原村大字下唐原の穴ケ葉古墳[4]の壁畫に認められる。又他の一群として宇佐平野の中心をなす四日市町の北西に連なる高さ二〇～三〇米の低い丘陵の南斜面に開口する横穴群中の七つの横穴羨門には彩色による幾何学的記號が存する。

石棺に裝飾を有するものとしては臼杵市北方の丘陵上に横たわる巨大な前方後円墳である下山古墳の長持型石墳の蓋石に線刻した裝飾がある。その他同所神下古墳の舟型式石棺の蓋石にも下山同様の線刻があるが裝飾としてはあまり見るべきものはない。

以上の他、別府市北石垣鬼ノ岩屋古墳の石槨内壁全面に朱塗りして裝飾したものや、西国東郡高田町字田の横穴古墳、大分市八幡の横穴古墳、日田市吹上の横穴古墳、等羨門一面を朱塗りしたもの等を裝飾古墳と考えるならば、全体で三〇余りの裝飾古墳が東九州全域に亘つて分布することになる。

(1)「大分縣史蹟、名勝天然記念物調査報告」　第五輯　日名子太郎
(2) 右　同　右　同　本荘　昇
(3) 筑後日ノ岡にて古代紋様の發見　坪井正五郎
筑後日ノ岡の石槨内面模様　考古学雑誌七巻七號
(4) 裝飾古墳の研究　齊藤　忠

三、裝飾古墳の形式

裝飾古墳は他の多くの古墳と同様に所謂高塚式古墳と横穴式古墳との二類に區別することが出來る。この中東九州地方に於ては未だ筑後國一條石人山古墳の如き古墳中期と推定される前方後円墳に裝飾を認めないことは特に裝飾古墳の編年的問題を検討するのに重要なことである。概ね形式は円形のしかも其の規模は極く小さい末期的なものが多いようである。勿論、前記の石人山古墳や肥後國チブサン古墳の如く外飾として石人等の石造物を有するとか、更に埴輪の円筒列を石人同様外飾にする等、又周湟、壘等を有する等のものは全く無く、古墳の封土を建設するのに必須とも考えられる基段すら存しない場合が多く、而して葺石等も配置しない高塚すら存して居る。其の爲か永年に亘り十類の流失が著しく内部の石槨の一部が露出して居る場合が多い。即ち封土はわづかに石槨を覆ふ程度の小規模であると云ふのが東九州地方の裝飾古墳の外形である。從つて古墳の外部構造から推論しても北九州地方の裝飾古墳との關係がある程度究明されるであらう。

扨、このように簡素な外形に比して内部構造は極めて充實したものが非常に多いのは又一つの特徴とも云ふことが出來る。特に日田郡五和村倉園の穴觀音古墳や、別府市北石垣塚原の鬼ノ岩屋古墳（所謂裝飾古墳ではないが各壁全面に朱塗してあり廣義には裝飾古墳のカテゴリールに屬す

るものであると考へる）等、羨道、前室、主室の所謂複室式の石槨を有する場合も存し、單室の場合でも玖珠郡森町平田山鬼ケ城古墳や、大分郡石城川村大字宮苑の千代丸古墳の如く玄室の奥壁より突出せる石棚狀の架構を有するもの等がある。又玖珠郡玖珠町小田鬼塚古墳の如く奥行七米二〇糎、高さ三米二〇糎の堂々たる穹窿狀の石室を有するもの、更に別府市鬼ノ岩屋古墳の主室奥壁下に石厨子を配す等、其の内部構造には可成り見るべきものが存するのは興味深いものである。以上の石槨及び石槨内の種々な構造と裝飾とは極めて密接な關係を有するものらしく主に裝飾は石室の壁面に直接施文する場合が最も多く、其の他石棚狀の架構の前面や石厨子、石棺、等に施文する。

以上の石槨を有する裝飾の外横穴に裝飾を有する例が多いのは前述の通りである。この横穴は構造が簡素である点、副葬品が比較的貧弱である点など高塚式古墳に比して被葬者の地位の相違を意味するものと思われる。この種のものは比較的全國的な廣範圍に亘つて点在するもので特に記すほどの事もないが東九州地方に於ては宇佐郡四日市町大字四日市加賀山一鬼手の横穴群等に數例發見されて居る。裝飾は古墳の羨門、即ち二重の外壁に円文を彩色するもので東九州地方として特異な存在である。

(1) 「筑後一條石人山古墳」　武藤直治　鏡山猛
「筑後國一條石人山古墳の調査報告」　梅原末治
(2) 「肥後國平小城村古墳チブサンの石棺及び模様に就いて」　波多巖
熊本縣下に於ける石人と其の表飾の古墳　梅原末治

四、古墳の壁畫

前述の如く裝飾は主に横穴式石槨の壁面や、横穴の壁面に直接彩色、或は彫刻により或種の構圖を有する畫文を施したものである。この施文の方法もくわしく檢討すると可成りの優劣、又は地方性を有するようである。同じ原始繪畫(プリミティフ)として微笑ましいものであつても東國東郡伊美町の鬼塚古墳の躍動的な立体畫(ヨウシス)と大分郡石城川村千代丸古墳の幼稚な用器畫法（幾何学的）とでは數段の藝術的差異のあることは其の優劣を示す好例である。これは九州北西部に群存する裝飾古墳に於てもそれぞれ地域的な特徴を感じさせられる。即ち筑前筑後地方にある裝飾古墳[1]二一例の内三例（久留米市日輪寺古墳、三井郡荒木村浦山古墳、八女郡下廣川村石人山古墳、等いづれも肥後に近接地方のもの）を除き他はことごとく彩色による裝飾[2]であるのに對して、肥後の場合は全くこれとは反對に二二例の裝飾古墳中三例（玉名郡石貫村清安寺古墳、鹿本郡小城村チブサン古墳、飽託

郡兩里村釜尾古墳などいづれも筑後に近接地方のもの）を除いてはすべて彫刻による裝飾であることは其の地方的特徴と云うことが出來ると思う。東九州地方でも筑後に近接する日田市近郊に存する裝飾古墳は彩色によるもので、其の他の海岸地方に点在する裝飾古墳は主に彫刻によるものであることは興味深い分布である。尙彩色彫刻等各一例を有す玖珠盆地の場合は以上二つの地方性を折衷する意味で又注目されるものである。

扨、以上の如く裝飾古墳には大要彩色と彫刻との二種類が存するが、其の構圖なり文様なりを大別すると大体次の三種類に分けることが出來る。即ち円文、三角文、直弧文などの所謂幾何学的記號と、器物、動物、人物などの所謂形象文様と、完全な自由畫の三つである。然し其の文様構圖に内在する繪そのものの本質的な分類をするならば、所謂自由畫を除いた前二つの幾何学的記號、及び形象文様は墳墓即ち被葬者に對する思想的な何ものかを意味する宗教的な觀点に立脚するもので、呪術的な要素を無視することは出來ないと考えるのである。これに對して第三の自由畫の場合は必ずしもそうした精神的なものから出發したものではなく、完全な藝術として、その人間の思惟があふれ出る寫實であると思われる。勿論、描かれた山林原野海濱の生活そのものが生産崇拜によるもので、廣義の宗教に關係を有して居ることには異論はないが、古墳そのものに對しての宗教的な連がりは認め得ないので第一群の精神的な類型と區別して考え度いのである。むしろある意味では純粋に藝術的觀点に立脚するものとして考えられるのである。以上の二つの場合について次に細かく述べることにする。

先づ從來幾何学的文様と云われたものは前述の如く呪術的な意味を有する記號と考えられるが、これ等の中で最も多く使用され且つ重要な位置に施文されている例の多いのは円文である。從つて円文に就いては特に注意がはらわれなければならない。この円文には單文、重圈文、其の他數種類のものがあり、又その組合せ方にも仲々面白いものを感じさせられる。即ち如何なる円文を有する裝飾古墳にあつても必ず円文自体に中心を有して居ることである。整然と並列するもの、ある區劃内に收められたものなど組合せ方はいろ／＼あるが、いづれの場合でもある中心を有して統制されて居る。この限りなく優れた中心、これは多くの先輩が說かれる如く太陽を象徴したものであろう。太陽の如きものを神聖視する信仰は勿論原始社會には當然存在すると考えられるからである。然しこれは單に太陽そのものを崇拜すると云うだけのものでもないと思われる。この円文を仲介として被葬者に對する人間の呪術的なものを含んで居るのである。即ち上古の墓制に見える物忌的なもの、喪屋と墳墓との關連性などについても檢討しなければならないのであつて、そう云ふ意味での除魔的な意義を有するものである。勿論その意味からは單に円文と稱されるものの中に鏡鑑をあらわしたものが含まれて居ること、特に單文の場合には注意しなければならない。東九州地方の裝飾古墳中この円文を以て裝飾されたものとしては日田市報恩寺山古墳第二號、玖珠郡玖珠町鬼塚古墳、等を主として數例存するが、報恩寺山古墳の場合は玄室奥壁の中央に單文

を中心として円文を配列させ、鬼塚古墳の場合は重圏文を中央に配し其の周圍に小重圏文を配列して居るので、前者は鏡鑑、除魔的意味を、後者は太陽を象徴する特殊な信仰を表わすものであらう。この他三角文、平行四邊形文、蕨手狀文、等が彩色されて居るが、これを筑前嘉穗郡王塚[3]古墳等のこの種の彩文に比すれば著しく内容のとぼしさが感ぜられる。

次に用器畫法により自然界を描寫した特殊な裝飾古墳がある。これは大分郡十代丸古墳の玄室奥壁より突出した石棚狀の架構の前面に彫刻によつて畫かれたもので、往時の竪穴式住居群、即ち聚落を表現したものらしく、すべて直線を以て屋根や窓を表わし其の間に人間二人と動物一匹をこれ又直線で畫いてある。この線畫は棒狀の金屬器の先端を釘狀に尖いた尖頭器を以て彫刻したもので、使用された石材は安山岩系のもので巾二米厚さ五十糎に及んで居る。

この千代丸古墳の用器畫法に對して東國東郡伊美町鬼塚古墳や玖珠郡秋町鬼ケ城古墳の裝飾は全くの自由畫である。これ等はいづれも自然界に於ける人間の營みを描いたもので、就中、鬼塚古墳は玄室奥壁及び左右兩壁面に描かれた古墳壁畫中の大作である。其の構圖の優秀な点では藝術家が驚嘆する程のもので、奥壁には山林、原野、海濱、に人間の狩獵生活を畫き、左壁の構圖は完全な自然界とこれを舞台とする群鳥を描寫したもので、いづれも優秀なタッチで彫刻された立体畫であり、往時の自然界を正確に畫いて居る。この鬼塚古墳同様の自由畫は筑前原田の五郎山[4]古墳の彩色による壁畫に認められるが畫法に著しい相異がある。即ち五郎山古墳の壁畫は直感と本能による所謂原始繪畫で鬼塚に比して多分に思惟の相異が認められる。尚、玄室右側の基部に石上位の石材には双禽が描かれて居るが、これは我國金石併用期の銅鐸に描かれた双禽[5]と略同様のものでこれ又極めて注目される。先に述べた立体的な壁畫に比すとこの双禽は我國上古にしば〳〵認められる畫ではあるが、古墳壁畫としては稀有なものである。いま一つの鬼ケ城古墳の壁畫もこの鬼塚古墳に非常によく似た構圖を以て隔壁に描かれて居り、その關連性が注意されて居る。

以上の彫刻による線畫は先に述べた彩畫、即ち東九州地方に於ては幾何学的記號によつて描かれた裝飾に對して極めて對遮的なもので興味は盡きない。

(1) 「九州に於ける裝飾古墳地名表」　鏡山猛
(2) 仝　仝
(3) 「筑前王塚古墳」　川上市太郎
「筑前嘉穗郡王塚裝飾古墳」　京都大学文学部考古学研究報告十一

(4)「北九州古文化圖鑑」二
(5) 日本考古学論攻

五、東九州の裝飾古墳

以上東九州地方の裝飾古墳について述べて來たが次ぎにそれ等の古墳個々について彩畫、彫刻、の二種類に分け全容を簡單に說明することにする。

一、彩色裝飾をなす古墳

(一)豐後國日田市日高報恩寺山第二號墳[1]

日田盆地を一望する台地上に營まれた古墳群中の一つで、円墳として完全に其の外形が保存されて居る。略々南面して横穴式石室が存在するが、現在封土により羨門を覆つて居り石室は全く露出していない。然し羨道の一部に小孔があり、石室内に出入りすることが出來る。石室は羨道及び玄室よりなり基部には安山岩系の巨石を以て配し、上位にしたがつて石材の縮約を見せながら積築し、天井は巨石一枚を以て横架されて居る。裝飾は玄室奥壁に朱色による円文を中央に配して居り、右壁積築の各々の石材に円文、重圈文、及び楯と思はれるもの等を、羨道の左壁にも円文、或は蕨手狀文、三角文等をいづれも朱色に施文して居る。

(二)豐後國日田郡五和村倉園穴觀音古墳[2]

日田市街を中心に環狀にこれを取り圍む南西丘陵上に營まれた円形墳で、高さ二米二十糎、直徑九米の小さな封土を有する。内部は羨道、前室、玄室よりなり、各室共下部に巨石を配して基部となし、上位に向つて中位の石材を以て積築し壁面をなして居る。天井は一枚石を以て横架し、特に注目すべき遺構は認められない。現在は玄室奥壁下に觀音菩薩を安置して附近の民間宗教の對象となつて居る。裝飾はいづれも朱色及び黑色を以て玄室奥壁には重圈文、円文等が認められるが、其の配置は別として可成り明確に施文されて居る。玄室兩側壁にも朱色の痕跡が存するが現在では判讀不明である。前室になると兩壁基部の巨石に円文及び舟等が畫かれて居る。即ち左壁には舟二艘と重圈文を、右壁には舟を中央に

其の上位に人間と一部麝消の矢容と思われるものを、左側には重圏文三が上下に配され、更に右側には蕨手文様の如きものが畫かれて居るが、いづれも円文以外はあまり明確ではない。然し構圖の複雑な点では注目されるものである。尚[3]顔料としては朱に酸化鐵を、黒に黒色マンガン鑛物を使用したものである。

(三)豊後國日田郡五和村石井ガランドヤ[4]古墳一號墳

日田盆地を貫流する筑後川の南側の河岸段丘上に營まれたもので、封土は取除かれ石室のみが露出して居る。石室は羨道玄室の二室からなり、基部に巨石を配し石材を積築したもので、石室内は小石土類等が集積して基部の狀況を明確に知ることは出來ない。裝飾は玄室基部の巨石に朱色を以て円文及び冊の集團を畫いて居り、其の周りを綠色でかたどつて居る。顔料[5]は前述の通りであるが綠色には綠色岩粉末を用いて居る。

(四)同前第二號墳

ガランドヤ第一號墳の西側に近接して營まれたもので第一號墳同樣封土が流出、石室は完全に露出し、石室の石材の一部も流用されて居る。石室は羨道玄室の二室よりなり、基部に巨石を配し、上位に中位の石材を積築したもので、天井は一枚の巨石を以て横架して居る。先と同樣室内は土類が堆積して居り的確に實測することは出來ない。裝飾は玄室の左側に朱色にて円文を畫いてあるのを認めたに過ぎないが、室内の綿密な調査によつては更に彩色による文樣を發見する可能性が殘されて居る。

(五)豊後國玖珠郡玖珠町小田[6]鬼塚古墳

玖珠郡の中央を貫流する筑後川上流の玖珠川が森盆地を經て山間溪谷に至る兩岸は河岸段丘が非常に發達して居る。この河岸段丘上に營まれた鬼塚古墳は封土上に建設された拜殿の爲全く原形を失して居る。然し横穴式石室は完存し其の構造は實に堂々たるものである。即ち羨道玄室よりなり、基部に巨石を配し石材を積築して上位に狹く穹窿狀の構造をなして居る。裝飾は玄室奥壁及び兩壁の基部隔壁[7]等に朱、綠の二色を以て円文を彩色したもので、特に奥壁の円文は中央に印象的な重圏文を配し、其の上下に各四つの重圏文を配して居る。顔料は前述の通りであるが、他の裝飾古墳に比して色彩は極めて鮮明である。出土遺物は全く不明となつて居る。

(六)豊前國宇佐郡四日市町大字一鬼手加賀山横穴群一號～七號墳

豊前宇佐平野を南に一望する丘陵上に營まれた横穴群で合計八十余り存するが、其の中央に一號～七號と假稱する裝飾を有する横穴がある。中

で最も優れて居るものは一號墳と稱されて居る横穴で、外壁が三重、玄室は卵形を呈し、別に注意すべき遺構は認めないが他に比して立派な構造を有して居る。裝飾は外壁に二重に彩色されたもので、羨門の兩側に二つの重圏文を主に、上位に四つ、下位に二つ、計八つの円文を畫いてある。此の一號横穴以外はすべて外壁に朱色を以て円文、或は蕨手文らしき文様を畫いたものであるが、特に二三號墳の羨門上位の外壁には人間らしい文様を認めることが出來る。いづれも近年落剝が甚しく其の保存に苦心して居る。尚東九州地方に於ては横穴に裝飾を有する例としては現在唯一の存在であるだけに注目されて居る。

二、彫刻裝飾を有する古墳

(一)豐後國東國東郡伊美町中鬼塚(8)古墳

國東半島の尖端、瀬戸内海、豐後水道、周防灘、の三つの内海を一望に收め本土四國を望む絶好の丘陵上に營まれた古墳の一つである。封土は墳頂附近が缺損の外概ね原形を殘して居るが、石室をわずかに覆ふ程度の小規模なものである。石室は羨道玄室の二室よりなり、巨石を基部に配し上位には比較的小石材を積築してあり、天井は一枚の巨石を以て蓋石としている外特に構造上注目すべき点はない。裝飾は玄室奥壁及び左右兩壁全面に線画されたもので、現在その構圖を判讀出來るものは奥壁と左基部の中央の巨石、右基部巨石上位の石材の前面に線畫されたもののみで他はことごとく落剝して其の痕跡を殘すばかりなのは現存する壁畫が優秀であるだけに残念である。玄室奥壁の線畫は巨石全面に往時の自然界を描寫し其の中に人間の營みを寫實したものである。左壁基部の巨石に線畫されたものは所謂群鳥でこれ又堂々たる大作である。更に右壁には銅鐸の双禽を思わせる貴重な印刻があり、全体として日本に於ける裝飾古墳中の壓卷である。尚この壁画は日本洋画界に於てもセンセイションを起し伊原宇三郎、福澤一郎の兩画伯はキュービズムの代表として現代の象徴画に通ずるものとして驚嘆したほどである。

(二)豐後國大分郡石城川村千(9)代丸古墳

大分平野を貫流する大分川の一支流賀來川の中流河沿段丘上に營まれた円形墳である。封土の基部は取除かれて居るが石室をわずかに覆ふ程度残存し横穴式石室が南面して開口して居る。この封土が前方後円墳であると推定する人があるが筆者の實測によつては円形墳であると斷定出來る。石室は羨道玄室からなり、いづれも巨石の積築で石室補強の爲に板狀の割石を以て巨石中を充塡して居る。特にこの石室には奥壁より石棚の

設備があり、其の前面に陰刻による裝飾がある。裝飾は用器画法で竪穴式家屋と其の窓を二重或は三重の三角形と四角形として並列させ、其の空間に人間二躰と動物を画いてある。思ふに往時の聚落を画いたものであらう。

(三)豐後国玖珠郡森町帆足字平田山鬼ヶ城(10)古墳

九州山脈の中央森盆地の東側大岩扇山麓の丘陵上に營まれた円墳で、封土、石室共に完存して居り、封土の南面に横穴式石室が存する。石室は羨道玄室の二室よりなり、共に巨石を以て積築されるが、千代丸古墳同様に奥壁には石棚を有して居る。裝飾は羨道玄室を隔てる隔壁前面に線画されたもので、其の構圖は伊美町鬼塚(11)古墳同様の完全な自由画で往時の山林原野に生棲する群鳥を描寫したものである。

(四)豐前国筑上郡唐原村大字下唐原穴ヶ葉山古墳

右に山國川左に佐井川を配し南に豐前平野を經て周防灘を望む丘陵上に營まれた円墳である。横式穴石室は羨道及び玄室よりなり、玄室を一枚の巨石を以て奥左右壁にあてた巨石墳である。裝飾はこの玄室左壁及び羨道左壁に陰刻したもので、鳥、木葉（森町鬼ヶ城のものに類似の葉針を有するもの）武器、等が施文されて居るが後世の追刻もあり、他の裝飾に比して亂雜である。尚この附近は円墳及び横穴古墳が相當群存する。

(五)豐後國北海部郡下ノ江村田井神下古墳

臼杵市街を南に望む平野に面した丘陵上に存する前方後円墳で其の形狀は甚だ変化して居る。後円墳頂に凝灰岩を材料とした舟型式石棺が露出して居るが、この石棺蓋部の家形の一部に陰刻せる線による平行四邊形の裝飾がある。

(六)豐後國臼杵市海部下山古墳

神下古墳同様山陵に存する巨大な前方後円墳で、其の後円部墳頂に露出した長持型石棺の家型の蓋部に梯形の彫刻が施されて居る。尚この下山古墳は昭和二十五年三月發掘調査されたもので墳丘に石人一躰を有する優秀な古墳である。

以上の外豐後國別府市北石垣鬼の岩屋古墳、同大分市水興弘法穴古墳、同大分市八幡横穴古墳、豐前國高田町美和字土横穴等に石室外壁等一面に朱色を以て裝飾したものが存するが、構圖を有しないものは考古学上裝飾古墳と認めない爲に本稿に於ては除外することにした。

(1)(2)(4)「日田市附近の裝飾古墳」考古学雜誌　三七卷三號　　賀川光夫
(2)　「穴觀音古墳」大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告　五　　日奈子太郎
(5)(11)「裝飾古墳」　　齊藤忠

(3)(5)(7)「裝飾古墳の顔料の化学的研究」　山崎一雄
(6)(10)「玖珠郡の二大古墳」大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告　九　河野清実
(8)「鬼塚古墳の壁画」文化財月報　三　賀川光夫
仝　仝　四　伊原宇三郎　福澤一郎
(9)「千代丸古墳」大分縣史蹟名勝天然記念物調査報告　五　本荘昇

六、結　語

以上東九州地方の裝飾古墳の概要を述べて來たが、先に述べた通り從來裝飾古墳の研究は東九州に於てはあまり行われて居らず、僅かに一二を知るのみであつた。然し現在筆者が檢討した限りに於ては、其の分布も筑前、筑後、肥後の諸地方には及ばないにしても、可成りの分布が認められ、線画を以て裝飾するものには特異な構圖をもつた壁画も存し、裝飾の内容に於ては必ずしも他に劣らない文化財が発見されて居るのである。從つてます〳〵今後の調査結果が期待されるのである。

（附表）

東九州地方の裝飾古墳一覽

	名稱	所在地	裝飾文樣	色彩彫刻	備考
1	法恩寺山古墳	日田市大字日高法恩寺	円文、楯形文 三角、蹼手、菱形文	赤	(1)
2	穴觀音古墳	日田郡五和村大字倉園	舟、人、蹼手、円文	赤、黑	赤（酸化鐵）黑（マンガン鑛物）(2) 文部大臣指定史蹟
3	ガランドヤ古墳第1號	日田郡五和村大字石井	舟、円文、不明文樣	赤、綠	赤（酸化鐵）綠（綠色岩粉末）(3)
4	ガランドヤ古墳第2號	同上	円文	赤	
5	鬼塚古墳	玖珠郡玖珠町大字小田	円文	赤、綠	赤（酸化鐵）綠（綠色岩粉末）
6	加賀山一鬼手横穴 (7)	宇佐郡四日市町大字加賀島一鬼手	人、円文	赤	
7	鬼塚古墳	東國東郡伊美町大字中	人、舟、動物、鳥	線画	自由畫彫刻 (4)
8	千代丸古墳	大分郡石城川村大字宮苑	家、人、動物	線画	用器畫法彫刻 文部大臣指定史蹟
9	鬼ケ城古墳	玖珠郡森町大字帆足	動物、鳥、葉	線画	自由画彫刻
10	穴ヶ葉山古墳	筑上郡倉原村大字下倉原	鳥、武器、葉	線画	形象的文樣彫刻
11	下山古墳	臼杵市大字海部	石棺塗刻	彫刻	平行四邊形
12	神下古墳	北海部郡下ノ江村田井	石棺線刻	線画	同上

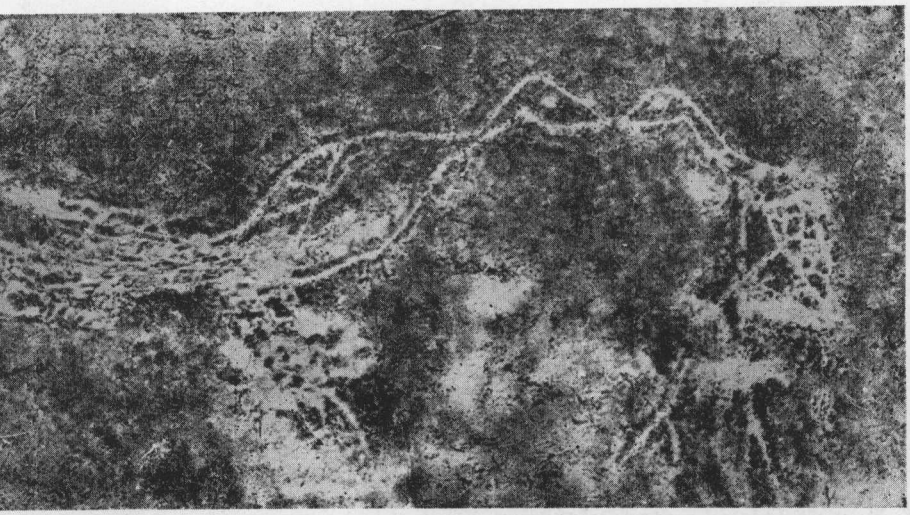
(1)(2)(3) 「日田市延部の裝飾古墳」考古学雜誌 37 卷3號 賀川光夫

(2)(3) 顏料の調査「裝飾古墳の顏料」 山崎一雄

(4) 「鬼塚古墳の壁畫」文化財月報 3號 賀川光夫，同4號 伊原宇三郎、福田一郎

群　　鳥

鬼塚古墳（豊後國東国東郡伊美町大字中）　玄室左壁線画拓影　I

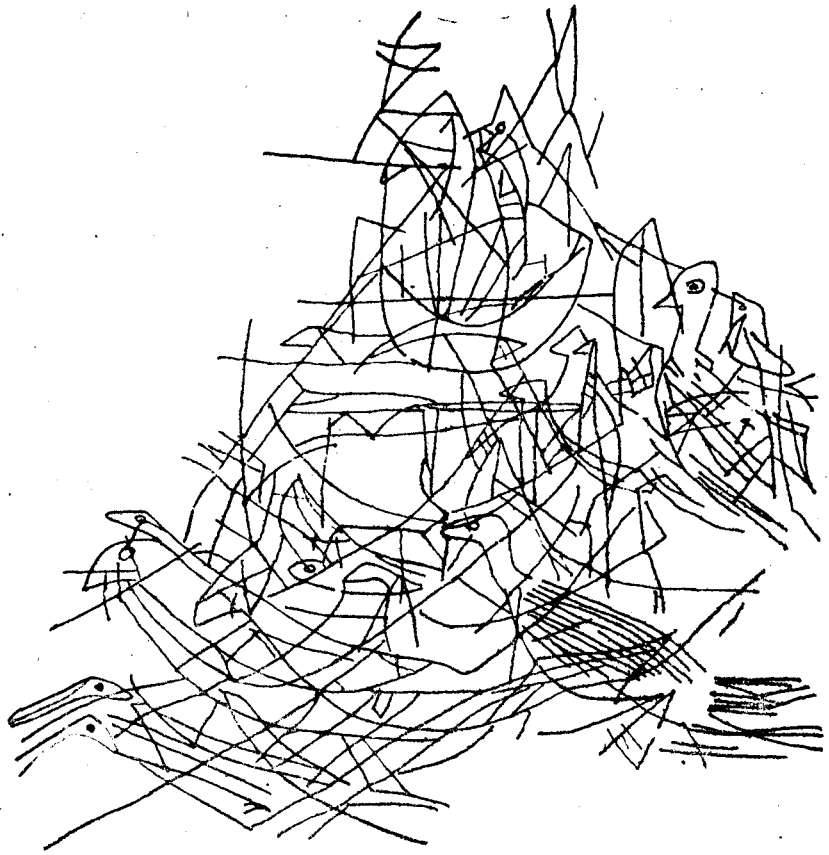


双　　禽

鬼塚古墳（豊後國東國東郡伊美町大字中）　玄室右壁線画拓影 Ⅱ

1　鬼塚古墳壁画「自然の營み」模写

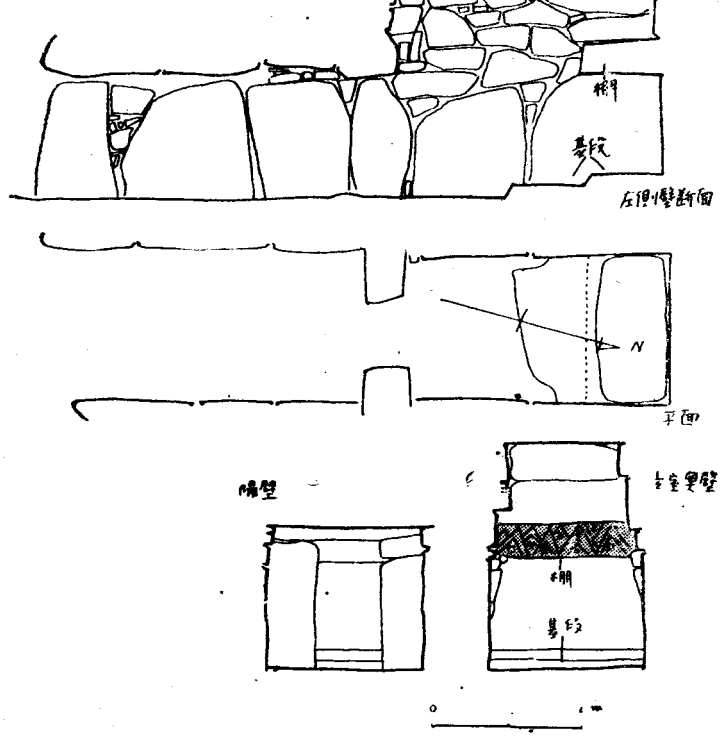
東國東郡伊美町大字中　　古墳玄室奥壁（縮尺5分の1）



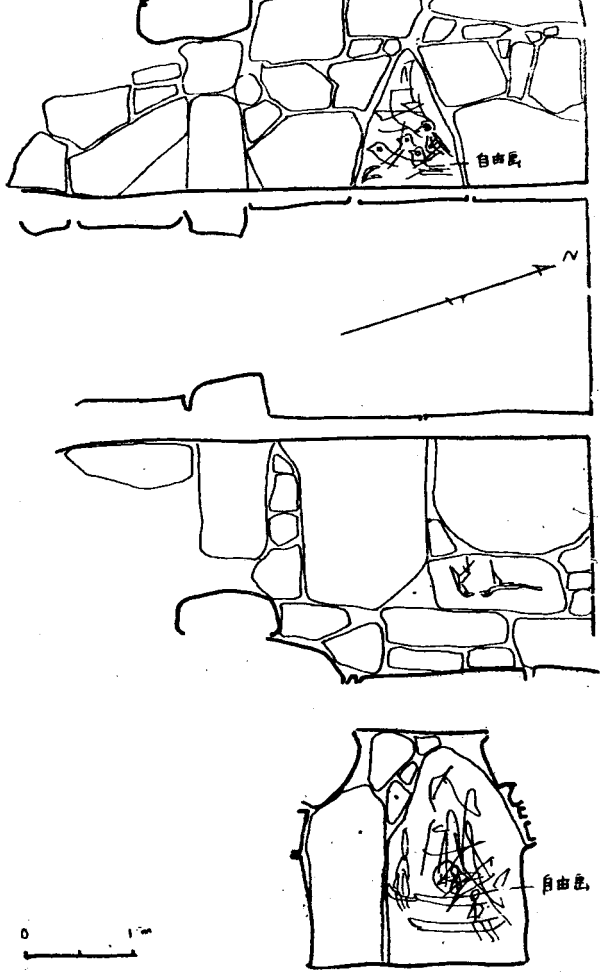
2

2　鬼塚古墳壁画「群鳥」模写（拓影参考）

東國東郡伊美町大字中　　古墳玄室左壁（縮尺５分の１）



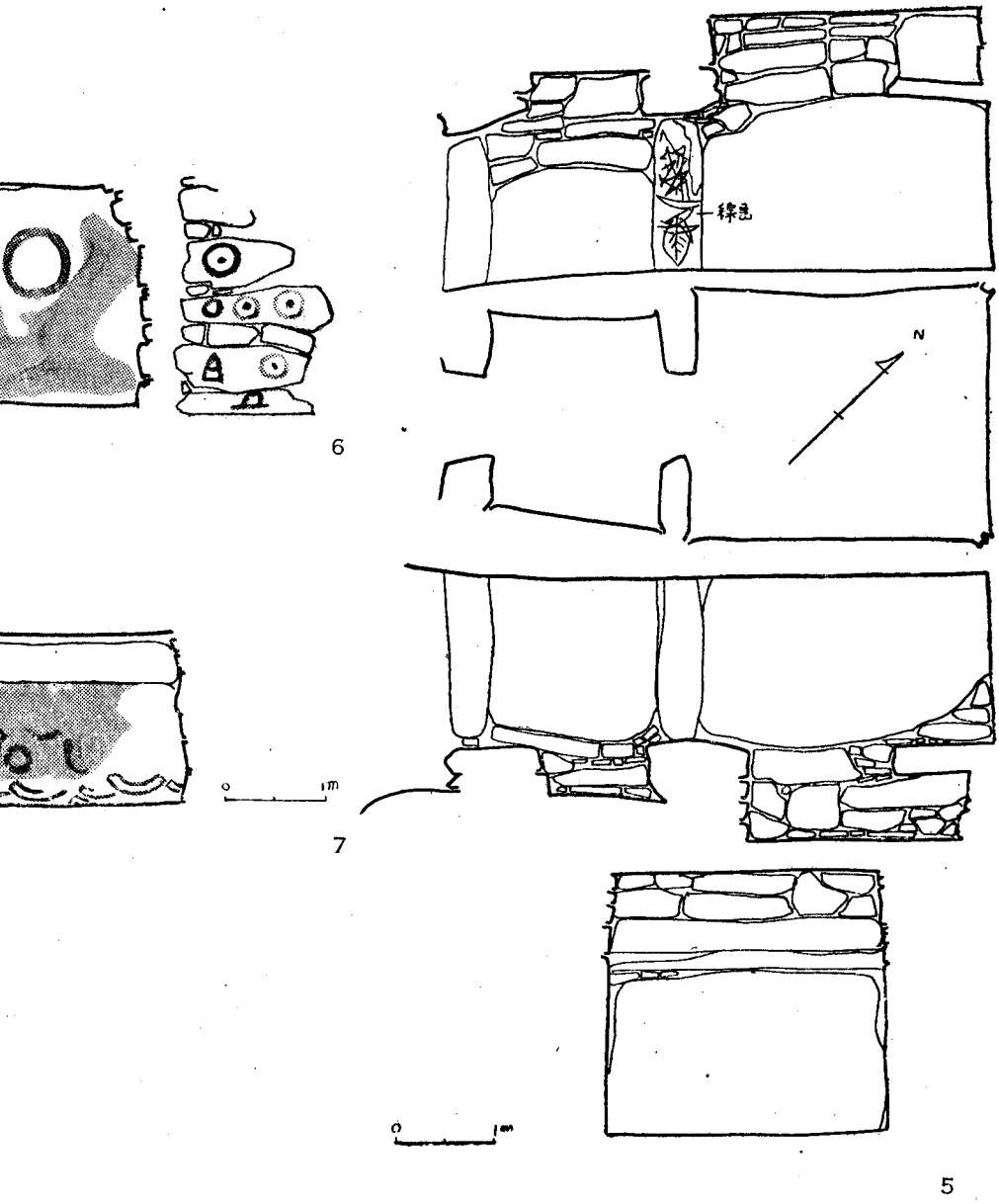
4



3

3　鬼塚古墳石室実測図（東国東郡伊美町大字中）

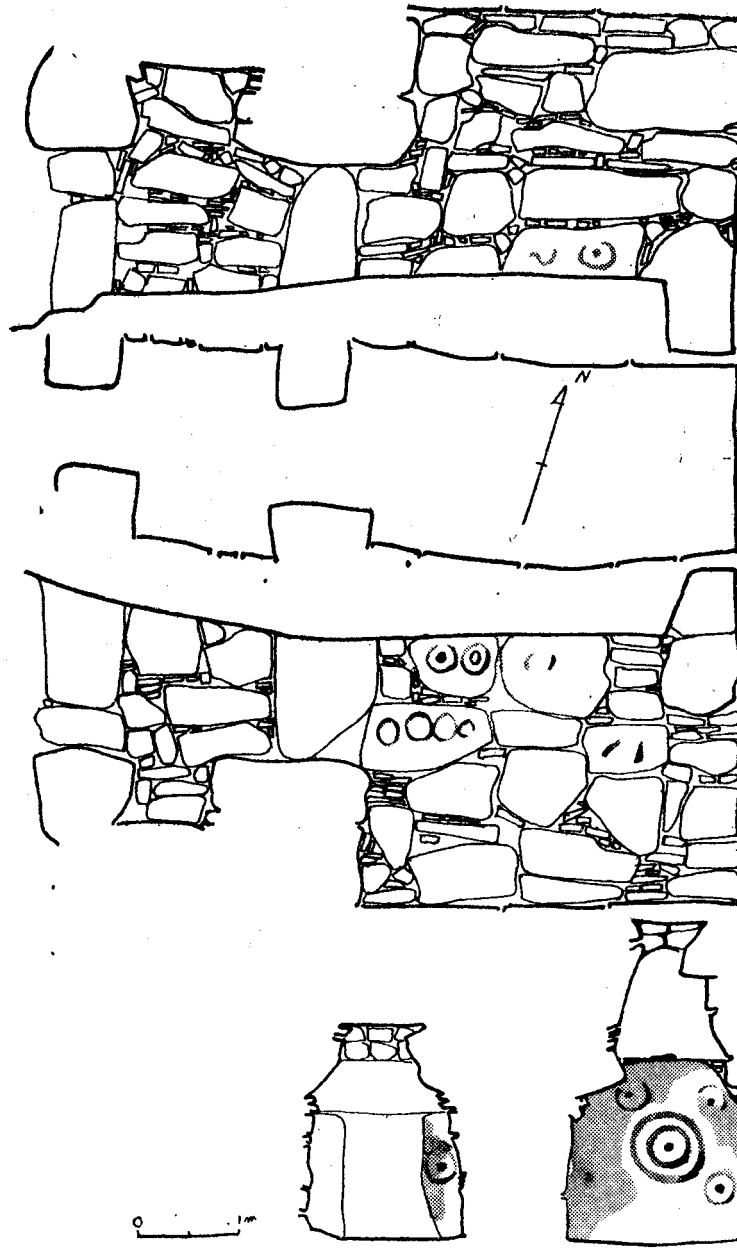
4　千代丸古墳石室實測圖（大分郡石城川村大字宮苑）



5　鬼ケ城古墳石室實測図（玖珠郡森町大字帆足）

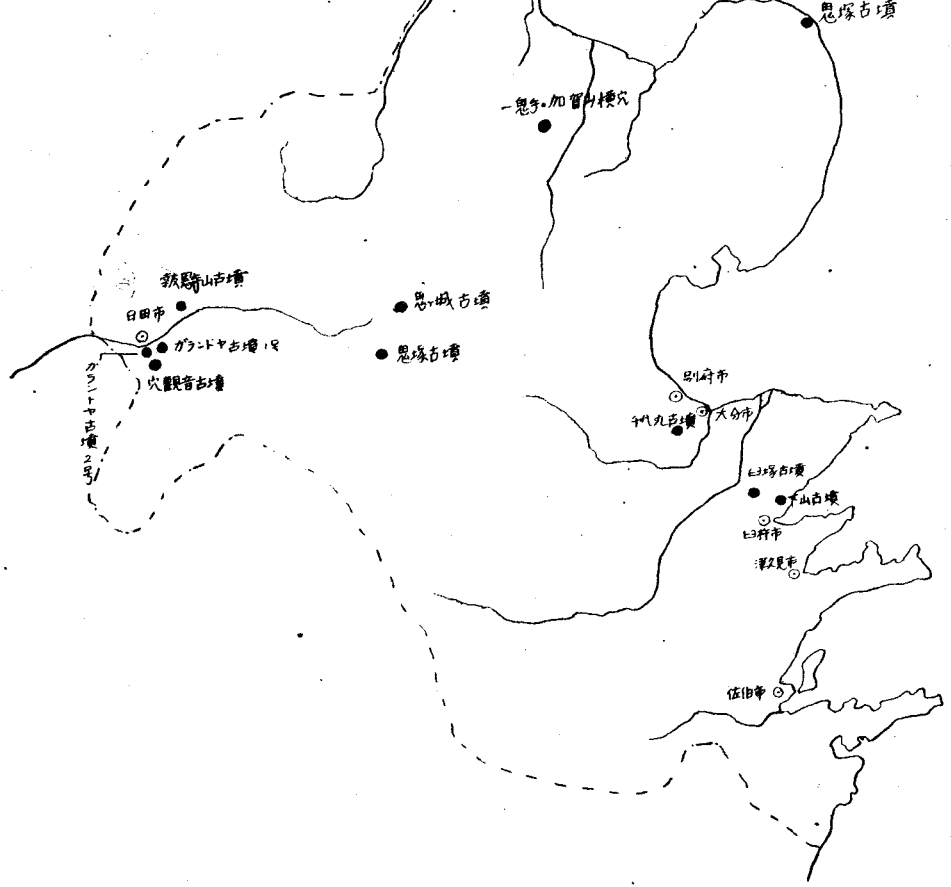
6　法恩寺山古墳石室實測圖（日田市大字三芳）

7　ガランドア古墳（1號）室玄実測圖（日田郡五和村大字石井）



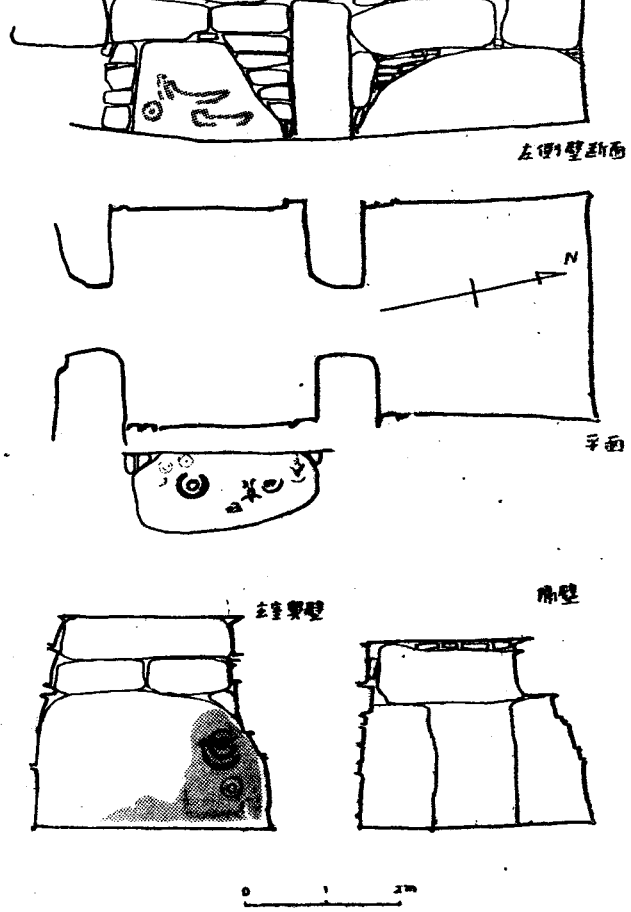
8

8　鬼塚古墳石室実測図（玖珠郡玖珠町大字小田）



10

10　東九州地方の装飾古墳分布図　1：1,000,000



9

9　穴観音古墳石室実測図（日田郡五和村大字倉園）